

2005年度建築計画委員会

春季学術研究集会

「京町家と大阪長屋」 再生からみた都心居住のあり方

建築計画委員会

今年度の建築計画委員会春季学術研究会は、「京町家と大阪長屋」 再生からみた都心居住のあり方 をテーマに、6月10日(金)と11日(土)の2日間にわたって京都と大阪の2会場で開催された。昨年度の研究会がCODAN東雲を対象とした都市集合住宅に関する研究集会であったことに引き続き、今年度も居住施設に関する研究集会となった。

今年度の研究会の趣旨は、現在、東京や大阪などの大都市において超高層マンションに見られるように都心居住が注目を浴びていることに対して、それらが良好なストック形成にはなりえない可能性も指摘されていることから、江戸時代から続く都市の歴史の中での都心居住の原点に戻って、さまざまなストック活用がありうるのではという立場から、関西圏の長屋に着目し、居住としての在り方のみならず、リノベーションによる様々なコミュニティ施設としての整備方策まで議論しようとしたものである。

京町家の現状

1 日目は京都市景観・まちづくりセンターにおいて京町家編の研究集会を催し、その後、街に出て見学会というスケジュールであった。京都市景観・まちづくりセンターは、京町家の保存・再生に関わっているセンターでもあり、研究集会に先立って同センターの展示コーナーを自由見学してもらった。研究集会では、まず、服部岑生建築計画委員長(千葉大学)の主旨説明の後、奥美里氏(景観・まちづくりセンター)による京町家の現状と行政支援の解説があり、京町屋が徐々に減少していること、修繕・改修のための資金調達が困難である状況などが報告された。引き続いて、八木康夫氏(立命館大学)によって、災害による町家の消滅が京都の歴史的な景観へ深刻な影響を与えることを明らかにしたシミュレーションが研究報告された。今まで景観としての取り組みは多くなされているが、災害面に言及した取り組みは少ないだけに、その成果は多くの聴衆の目を引いたようである。

その後、四班に分かれて下京区と中京区を歩き巡り、京都芸術センターに至るまでのルート上の京町家をいくつか見学した。蒸し暑い中、降雨を気にしての見学会であったが、あちらこちらで集合住宅が建設中である京都の街中の現状や、その中での京町屋の位置付けなどを考えるよい機会となったと思われる。

大阪長屋の現状

2日目は午前中、大阪市内の長屋を自由見学とし、午後からは大阪市立住まい情報センターにて研究集会というスケジュールであった。見学コースとしては、<空堀地区><中崎地区><阪南地区>の三ルートと、センター併設の<大阪くらしの今昔館>見学の計4コースを設定し、マップを配布した。江戸時代からの長屋や明治時代の長屋など、建設時期によって様相が様々であることを実地に感じてもらう予定であったが、あいにくの大雨のため参加者が少なかったのが残念である。

午後からの研究集会では、井上守・寺内信・橋爪紳也・弘本由香里氏を講師に大阪長屋編の研究集会を実施し、まちの再生と大阪長屋の関係について議論された。まず、服部岑生建築計画委員長の主旨説明の後、寺内信氏と弘本由香里氏により大正・昭和初期にかけて成立した大阪長屋の都市計画行政がスライドを交えて総合的に解説され、大阪長屋の再生がセルフビルド、ソーシャル・ミックス、インキュベーションを介してまちづくりにつながっていく可能性と魅力があるとの実態が報告された。また、都市における居住システム、住居の所有・賃貸のあり方、商業施設への転用など重要な論点があらためて整理された。その後、四名の講師により、大阪長屋の再生が住む人とまちとの直接的な応答関係を生み出し、都市再生の鍵になるという考えと、40年後に我が国の人口が3000万人も減少することを意識して現代における都市居住の様式を全体的に考え、その中に大阪長屋の再生を位置づけたいとする意見がたたかわされ熱い議論となり、将来の都市居住を考える素材が多角的に提供できたと考えられる。

なお、京都市では「住み続けられる町家」を目標に数十年前から町家支援や再生事業が展開されていることが1日目の報告でわかったが、残念ながら大阪市では破壊の臨界点を超えてから大阪長屋に関心が生れたので、残存する大阪長屋は比較的少ないことが保存・再生への最大の問題であろう。

森田孝夫 / 京都工芸繊維大学、横田隆司 / 大阪大学